

褥瘡予防寝具としてのエアークラウド型マットが寝床内気候へ及ぼす影響

長野県短大

○中山 竹美

林 千穂

〈目的〉 長期寝たきり者にとり、褥瘡は深刻な問題となっているが、褥瘡予防上、寝床内の気候は重要であると考えられる。前回、在宅寝たきり老人の寝床内気候についてフィールド実験を行なった結果、特に夏季におけるエアークラウド型マットの使用の効果が示唆されたことを報告した（日本家政学会第44回大会）。本研究では、高温環境下におけるエアークラウド型マット使用が、人体や寝床内気候に及ぼす影響について、実験室実験を行ない検討した。

〈方法〉 実験は1993年7月、健康な女子学生6名を被験者とし、気温26℃、相対湿度60%の人工気候室で行なった。サーゲージ・インソリズムを考慮し実験は午後の一定の時間に行なった。敷寝具には敷布団とシーツを、掛け寝具にはタオルケット（綿100%）と毛布（毛100%）を用い、エアークラウド型マットを使用する場合にはシーツ下に入れた。被験者は直腸温の安定後、皮膚温と寝衣内温湿度を貼付し、15分間の椅座安静の後、入床し90分間仰臥位で安静を保ち、その間15分毎に着用感の申告を行なった。

〈結果〉 (1) 直腸温は、エアーマットありの方がエアーマットなしより、入床8分後から有意に高い値を示した。(2) 皮膚温は、入床16分後から背において、エアーマットありの方がエアーマットなしより有意に低くなった。(3) 背の寝衣内温度はエアーマットありの方がエアーマットなしより入床30分後から有意に低い値を示した。(4) 腰の寝衣内絶対湿度は、エアーマットありの方がエアーマットなしより低い傾向であった。(5) 着用感はエアーマットありの方が良好な評価であった。